

大谷大学／
大谷大学短期大学部
学長
草野 顕之



社会でただちに役立つ知識より
ぶれない柱を心の中につくる。
「人間学」の探究が本学の使命

本

学は浄土真宗を学ぶ私学として1901年に東京で開学した

後、京都に移りました。その後、大学令に基づいて公教育を担うにあたり、先人が決断したのは、「仏教を中心に、その周辺学問である哲学や歴史学、国文学などの人文科学を根幹に据える」とことでした。戦後、多くの大学が総合大学化するなか、今なお文学部だけの単科大学にこだわるのは、「いたずらに拡大し、建学の精神を希薄化させてはいけない」という、歴代の学長による共通認識のためだと思っています。

ただ、人文科学へのこだわりは、近年の実学志向との間に一定の距離を置くことにもなっています。「手に職」や「社会で役立つ力」を求める風潮の中で、

学生募集上の苦勞も伴います。

それでも我々は、大学の学問のあり方を真剣に考えねばならないと思うのです。「今の社会にただちに役立つ知識」とは、「今の社会が変わればたちまち役に立たなくなる知識」であるとも言えます。では、真に役立つ力とは何か。言葉を変えて問うなら、真に人が育つとはどういうことなのか。それは、不安定な社会にあつて、どのような境遇に置かれても、ぶれない柱を心の中につくることだと思っています。

初代学長は、「自己とは何ぞや。これ人生の根本的問題なり」という言葉を残しています。以来、常に人間の存在について考え続けてきました。本学ではそれを「人間学」という言葉で表し、あら

ゆる教育・研究活動を通じて探究し続けています。それをやめてしまったら大谷大学は終わり。それくらい自負心と信念がそこにはあります。

仏教に基づく人間学に加え、もうひとつの軸にしたのが教養力であり、そのために今年度から副専攻制を導入。専門とは別の分野を学ぶことで幅広い学問的素養を身につけてもらいたく思っています。知識の偏った人間を育むことが大学の役割とは思わないからです。

私自身が大学入学後に実感したことです。大学の学問とは、知識を覚えることではなく、自ら課題をみつけ、その解決に向けて一歩でも二歩でも近づこうとする学びのことです。そして、人間にとって最も大きな課題といえは「人とはどういう存在か」「どう生きるべきか」といったことだと思っています。

覚えるのではなく、考える。そうした転換が起こるのが大学であるとすれば、先ほどの話に戻りますが、ただちに社会で役立つ勉強や、資格を取得するためだけの勉強というのは、転換が起こる前の学習に近いでしょう。

どうか目先のことにとらわれず、大きくものをとらえてください。大谷大学はそうしたアカデミックな教育を今後も大事にしていきたいと思っています。

【学長プロフィール】くさの・けんし●1952年生まれ。大谷大学文学部史学科卒業。同大学院文学研究科博士課程満期退学。博士(文学)。大谷大学特別研修員などを経て文学部教授。学生部長、学監・文学部長などを経て2010年より現職。専門は日本仏教史(中世)、真宗史。

【大学プロフィール】1665年に設置された東本願寺の学寮を源流として1901年真宗大学として開校。文学部(真宗学科、仏教学科、哲学科、社会学科、歴史学科、文学科、国際文化学科、人文学科、教育・心理学科)および短期大学部(仏教科、幼児教育保育科)。